

― 私の文学館散歩 (十四) ―

小泉八雲をめぐる点と線

― なぜ私は、府中から青梅、松江経由で京都までの散歩に出たのか ―

松村 茂治

はじめて八雲に会った頃

私が小学校に入学したのは、昭和二十九年、ちょうどその年、当時の都下府中町とそれに隣接する多摩村および西府村が合併して府中市が誕生したのだった。私は、学区の西府小学校に通うことになっていたが、市制施行に伴い、突然、府中市立府中第五小学校に通うことになった。といっても、私の住まいや行くべき学校が変わったわけではなく、西府小学校が府中第五小学校に校名変更しただけのことである。

ところが、この件に関して大きな思い違いをしていたこ

とに、この原稿を書く段になって気づいた。

私たち家族は、私が小学校に上がる一、二年前に、現在の府中市に越してきた。もの心がついてからはずっと府中市に住んでいたので、越してきたのも府中市と思い込んでいた。入学する予定だった西府小学校も、特に考えたことはなかったが、当然、府中市の学校と思っていた。つまり、西府村に越してきたということは全く意識していないのに、入学する学校が西府小学校だったということは覚えていたということになるが、それにはちよつとした訳がある。

入学に先立って、母の実家に行った時のことである。そ

こに、母の弟が居合わせ、私の帽子についている徽章を見て、自分と同じく西の徽章だという趣旨のことを口にしたのである。この叔父は、この年から、都立西高校に通うことになっていたのである。私としては、まだ、平仮名さえろくに読めなかったのだから、西という漢字をきちんと認識できていたのか、正確なところは分からないが、それ以来、私には、「西府小の西は、西高の西と同じなんだ」という思いだけは残っていた。

しかしながら、これを書きながら、一つの疑問が湧いて来た。四月からみすみす使われなくなることが分かっている徽章を、あえて用意したのかという疑問である。裕福な家なら、記念のために、ということも考えられるが、我が家はそのような家ではなかった。いや、そもそも、私の両親は、自分たちが西府村に越してきたということを自覚していたのだろうか、あるいは、昭和二十九年の市制施行を知っていたのだろうか、そして、西高に入学した叔父は、徽章の「西」の字が同じだと言ったことを覚えているのか等々、確かめようとしても、今や皆鬼籍に入ってしまった。

西府村も西府小もなくなってしまったが、「西府」の名称には後日談(?)がある。

十数年前、川崎と立川を結ぶ南武線の分倍河原駅と谷保

駅の間に、西府駅が誕生した。近くに、府中市西府町があることを反映したものと思われるが、この近くには、戦前、西府駅があったことを忘れてはならない。しかも、現在の西府駅の真前には、府中市立第五小学校がある。しかしながら、この学校が、かつて西府小学校と呼ばれていたことを知る人は、今やどれくらいいることだろう。

いつものことながら、前置きが長くなってしまった。小学校のことから書き始めたのは、ここで小泉八雲に出会ったからであるが、もう少し学校の話を進めないと、八雲に出会えない。

はじめての八雲作品

府中市立府中第五小学校は、東京都府中市の西の外れ、武蔵野台地がそこで終わり、眼下に多摩川が作った広い河岸段丘面を臨むような所にある。昭和三十年に制定された校歌を見ると、その場所がはつきりする。

一番の歌い出しは、「稲の穂渡る風に乗れ、小鳥の群れが飛んでくる」である。高台にある校庭の眼下には水田が広がり、田植えや稲刈りを間近に見、藁を燃やす煙の臭いを嗅ぎながら過ごしてきた。当時水田だった所には、今や大きな電子器機の工場が建ち、そのすぐ先を中央高速道路

が東西に貫いている。この高速道路によって、水田一帯は南北に分断される形になった。そのために、ずいぶんと不便になった農家もあったと思うが、いつの間にか、水田は住宅地に変わり、農業を続けるような時代ではなくなっていた。

二番の歌い出しは、「鮎の子走る多摩の川、さざ波きららゆれおどる」である。水田地帯の先に東京を西から東に貫く多摩川が流れている。当時、私の家は多摩川に架かる関戸橋の少し手前にあった。その辺りでも、鮎は泳いでいたようだが、子どもたちが泳ぐことは禁止されていた。流れが急だったり深かったりして危険だからということもあるが、それよりも上流からの生活配水による水質汚染が深刻になって来たからと記憶している。

そして、三番には「みどりの丘に浮く雲も 是るかに運ぶ若い夢」とある。「みどりの丘」は、多摩川の先に連なる多摩丘陵のことだろう。そこは、万葉の昔から、「多摩の横山」と詠われてきた由緒ある丘陵地帯で、私は、ときに、そこに炭焼きの煙が上がるのを眺めながら、家路にいったのだった。

その「みどりの丘」に多摩ニュータウンの建設が始まったのは、私が小学校を卒業してしばらくたってから、昭和四十年頃のことではなかったろうか。それ以降の「みどり

の丘」の変貌ぶりは著しく、それを最も分かり易く描いているのが、スタジオジブリの「平成狸合戦ぽんぽこ」である。ニュータウン建設によって、自分たちの棲家を奪われていく狸たちの存亡をかけた戦いの話で、はじめのうちは笑いながら見ていたが、その地に知り合いがいることを思い出し、彼らは、どのような思いでこの映画を観るのだろうか、複雑な気持ちになったものである。

私は、ここに歌われて来たとおりの風景の中で過ごして来た。おそらく、校歌作詞者の岡本敏郎氏は、学校まで足を運び、この風景を目の当たりにして作詞したに違いないと考えている。

この府中第五小学校での生活も残り一年というとき、眼下に稲田が広がり、遠くに多摩丘陵を臨む教室に、教冊の日本文学全集が置かれたのだった。それは、学級担任のW先生が、自宅にあった本を、学級文庫として置いてくれたもので、その中の一冊に、『小泉八雲集』が入っていた。おそらく、夏目漱石集や山本有三集、武者小路実篤集なども入っていたのだろうと思うが、読んだ覚えはない。特に本好きだったわけでもなく、まだ「耳なし芳一」の存在さえ知らなかった私がどうして八雲集を読むことにしたのかは覚えていない。たまたま手にした八雲集の目次が解説に『怪談』の二文字を見つけ、興味を持ったのではなからう

か。当時の私は、夜、一人でトイレに行くのも怖がったほどの臆病者だったが（当時は汲み取り式便所だった！）、江戸川乱歩は読んでいたわけだから、怖いもの見たさの心理が働いたのかもしれない。それに、八雲の小説はどれもとても短いので、特に読書が得意でない私でも、とっつきやすかったということも考えられる。

このとき読んだ作品で、いつまでも怖かったのは、「のつぺらぼうの話」である（私はずっと、「のつぺらぼうの話」と思っていたが、ずっと後になって、『むじな』というのが正式なタイトルであることを知った）。

事件は、東京のど真ん中、赤坂の紀伊國坂で起きた。紀伊國坂と言えば、港区赤坂見附から四谷に向かう外堀通り的一部で、現在では、一方に迎賓館を、堀を隔てた反対側には有名なホテルを擁した都心の一等地ということだが、江戸時代には随分と寂しい所だったようだ。確か、ここからそれほど遠くない所に、狸穴^{まみあな}という名ついた町があるのではなかったか。

その坂を、夜遅く、ある男が登って行くと、お堀端に女が一人うずくまって泣いている。男は、近寄り、「困っていることがあったら、言ってみなさい。自分にできることがあれば、何でもしてあげるから」と声をかける。女は、

泣きじやくるばかりだったが、男の説得によりやく顔を上げ、着物の袖を下して手で自分の顔を一撫ですると、女の顔には、目も鼻も口もなくなっていた・・・というのが粗筋だが、事件はここでは終わらない。

驚いた男は、助けを求めて暗闇の中を走り出す。しばらく走ると、ようやく遠くに灯りが見える。近づくと、それは屋台のそば屋の提灯だった。男は、息も絶え絶えに、そば屋の足元に倒れ込み、今見てきたことを訴えようとするが、なかなか言葉にならない。ようやく「出たんだ、出たんだよ、女が。お堀端の所にな。・・・その女が、私に見せたんだよ。見せたんだ・・・ああ、とても口では言えない！」と訴えると、すかさず、そば屋は「だんな、その女が見せたって言うのは、こんなもんじゃなかったですかい？」と言って、自分の手で顔を一撫ですると、そば屋の顔ものつぺらぼうになった（引用は、「新編 日本の面影」による）。

この話がいつまでも怖かったのは、最初に読んだ作品だったからということもあるが、当時の私の通学路も影響していたように思う。

校歌にあるように、当時の通学路は、「稲の穂渡る風」が吹くような、何事もなければ、のどかな田舎道ということになるが、通学時間帯を除けば、ほとんど人が通らない

ような寂しい田んぼ道だった。街灯もなく、人家もまばらな曲がりくねった道を、三十分以上かけて通っていたのである。途中の道沿いには、集落の墓地もあった。もちろん、たいていは友人と遊びながら帰って来たので意識はしなかったが、時には一人で帰らなければいけないこともあった。そんなとき、墓地から何か出て来ないか、用水路に架かる橋のたもとに女がたたずんではないか。近くに家はないし・・・家があったとしてもそこにもものつべらぼうがいたら・・・などと、真剣に心配したものである。

他の作品で、はつきり覚えているのは「耳なし芳一」である。ただし、これは小学生のときではなく、中学生になつてから読んだのではなかったろうか。

中学の国語教師に、朗読の上手な教師がいて、どこかのクラスで「耳なし芳一」を読んでもくれたことがあり、とても怖くて、泣き出す子もいたということを教えてくれる友人がいて、だったら読んでみようと思ったのだった。お化けの存在には、疑問を持ち始めていた年頃とは思ふが、話の進め方に現実味があつたからだろう、とても印象に残る作品だった。

「雪女」も読んだと思うが、いつ頃読んだのかはつきりしない。この作品については、青梅での出会いが驚きだった。

な川が流れていて、渡し船が通っていました。（中略）

あるとても寒い日暮れ時のことでした。家路につこうとしていた茂作と巳之吉は、激しい吹雪に見舞われました。船着き場にたどりついてみると、渡し守は船を向こう岸につけたまま、帰ってしまっていました。とても向こう岸まで泳いで渡れるような日ではありませんでした。二人は渡し守の小屋を見つけると、これ幸いと身を寄せました（「日本の怪談」220頁）。

「武蔵の国のある村」というのは、現在の青梅市のことらしい。しかし、展示資料の中に「調布」という文字を見つけたので、はじめのうちは、武蔵の国の調布なら、世田谷区の隣の調布市ではないのか、なぜそれが青梅に？と思つたのだった。そして、青梅市を流れている大きな川といえば多摩川だろうし、その下流には調布市もあるので、「雪女」は多摩川つながりの話なのかと思つたのだった。

青梅市の沿革を調べてみると、青梅市は、府中市よりも少し早く、昭和二十六年に、当時の青梅町や調布村などが合併して誕生したということである。ここにも調布があつたということを初めて知つたのだが、この地も、ずっと下流の、私が勘違いした現在の調布市付近と同じように、租庸調の《調》として、布を献上していたということなのだ

た。

青梅・昭和レトロ館

青梅にある、昭和レトロ館に初めて行つたのは、数年前、本シリーズの執筆に際して、参考になるものを探しに行つたときだから、第四十一号の「乱歩に導かれた、懐かしい時代への散歩」のときではなかったかと思う。この町では、昔懐かしい映画看板を展示して、町興しの一助にしていると聞いていたので、怪人二十面相や少年探偵団に関する映画資料があるのではないかと思つて行つたのだった。残念ながら、二十面相にも小林少年にも会えなかったが、意外なことを知つたのだった。

レトロ館の、急な階段を上った二階の八畳ほどの畳の部屋が、小泉八雲の、というより「雪女」に関する展示室になつていた。何の予備知識もなかったもので、どうしてここに「雪女」が・・・というのが、第一印象だったが、この作品の舞台は青梅だったという説明を読んで、改めて意外な気がしたのだった。

武蔵の国のある村に、茂作と巳之吉という二人の樵が住んでいました。（中略）毎日二人は、村から二里ほど離れた森に出かけて行きました。森へ行く途中には大き

ろう。

展示室に掲示されている説明を読み、「雪女」は、ここ青梅を舞台にした話らしいということは理解したのだが、いま一つ釈然としないのは、青梅に雪女が出たということ、これまで一度も聞いたことがなかったからである。私は中学生の頃から、五万分の一の地図が、赤鉛筆で真っ赤になるくらい奥多摩の山歩きに馴染んできたので、雪女伝説が事実なら、どこかで見聞きしてもいいはずなのに、人の話にもガイドブックにも、そうした話はなかった。

確かに、青梅なら、東京都とはいえ、奥多摩の入り口のような所だから、吹雪に閉じ込められるようなこともあるだろう。山に囲まれた土地柄だから、樵を生業にする人たちがいても不思議ではない。つい最近まで、奥多摩から材木を筏にして多摩川を流していたことは、聞いたことがあるし写真でも見たことがある。また、多摩川は大きな川なので、橋を架けるのは難しかったろうから、渡し船の利用もなすところである。こうしてみると、ここ青梅が「雪女」の舞台であると主張されると、状況証拠的には納得せざるをえないところだが、どこかしっくりしないのも事実である。いつ頃、どれくらいの範囲の人たちの間で、この話が共有されていたのだろう。

話は前後するが、この後で述べる松江への旅の後、「雪

女」のことが気になって、もう一度、レトロ館を訪れてみた。

展示されている資料のなかに、八雲の「怪談」の序文があった。おそらく、数年前に訪れた際にも展示されていたのだろうと思うが、全く記憶になかった。そこには「『雪おんな』という奇妙な物語は、武蔵の国、西多摩郡、調布村のある百姓が、その土地に伝わる古い言い伝えとして私に語ってくれたもの」と、八雲自身が書いている。この調布村の百姓というのは、東京帝大講師時代の八雲宅に、庭師として出入りしていた男とのことである。

展示資料の中にはいくつかの新聞記事があり、「雪女の郷は東京・青梅にあった!」「『雪女』の舞台 意外青梅だった」等の見出しが目に残った。この表現から、青梅に雪女が出たということは、最近になって知られるようになったということがよくわかる。どちらも、「初めて聞くような話だけれど」というニュアンスを含んでいるからである。百五十年前の八雲の時代には、この辺では誰もが知る話だったのかもしれないが、「怪談」の序文に気づいた学者がそのことを指摘したのは、平成になってからのことである。しかも、地元の人たちは、最初のうちは取り合わなかったということだから、まさに、「雪女」は、突然

降って湧いたような話だったのだ。

二階の展示室の片隅に床の間があり、「雪女縁の地」という揮毫に小泉時の署名のある掛け軸が架けられている。小泉時氏は、八雲の孫で、突如持ち上がった「雪女青梅舞台説」に、八雲側の関係者として名を連ねていたようだ。揮毫にある「縁」という表現が言いえて妙であると思った。つまり、「雪女」の舞台がここだったと言える確たる証拠はないが・・・という意味が込められていると思ったのである。

レトロ館から歩いて十五分ほどの所に、調布橋が架かり、そのたもとに「雪おんな縁の地」の記念碑が建っている。石碑の文字も、小泉時氏の手によるものという。橋が架かる前には、ここに渡し船が通い、二人の樵は、それを使って仕事に出かけて行った。そして、吹雪の夜、向こう岸に足止めをされ、雪女に出会ったのだった。

思いは松江に

わが家に届いた大手旅行会社のパック旅行の案内が気になっていった。今まで、旅行と言えば、国内旅行も海外旅行も、個人旅行と決めていたので、ときどき新聞に掲載されるツアーの案内を見ても、こうして送られてくるダイレクトメールを見ても、「こういうコースで行くのか」「この

値段で行けるのか」といった程度の感想を持つことはあっても、真剣に参加を検討したことはなかった。しかし、今回のパンフレットは事情が違っていた。

表紙に「松江・安来・出雲」とあるのが効いていたのは確かなことだ。妻も私も山陰を旅したことがなかったので、常々一度行ってみたいと思っていたが、現地の地理や交通事情がよくわからず、個人で計画を立て、列車やバスを乗り継いで移動はかなり厄介なものになると感じていたのである。だからといって、直ちにパック旅行という気持ちにならなかったのは、集団行動だと必ずしも自分の行きたいところには行けず、時間にも急かされると聞いていたからである。そうした不都合さは承知の上で、今回、参加に踏み切ったのは、パンフレットの中に、「八雲曾孫・小泉凡氏 特別セミナー」の宣伝文句を見つけたことが大きい。安来の「足立美術館」、山陰を満喫する「松葉蟹料理」などの誘い文句もあったが、これだけでは私の食指は動かなかつたろう。以前から、八雲の作品について、二、三確かめたいことがあったのである。

八雲の足取り

八雲の来日は、明治二十三年（一八九〇年）四月、その年の八月末に、松江の尋常中学および師範学校の英語教師

として赴任したということは知られているが、飛行機も新幹線もない時代に、どういう経路を経て、幾日かけての移動だったのか、気になった。

八雲の随筆「盆踊り」は、松江に向かう旅の道中で見聞いたことをモチーフにした作品で、その冒頭には、「はるかな山々を超えた向こうに、古代の神々の国、神代の国出雲がある。人力車を強靱な車夫たちに引いてもらいながら、太平洋側から日本海側へと抜ける、四日間の旅である。」（「日本の面影」 47頁）とある。

八雲と通訳の真鍋晃の一行は、前の年（一八八九年）に開通したばかりの東海道線を使って神戸まで行き（姫路までという説もある）、そこからは人力車と船を乗り継いで松江に向かったようだ。

八雲の言う「太平洋側」というのは、神戸あるいは姫路のことであり、「日本海側」というのは、松江ではなく、中国山地を抜け出た、鳥取県の西部、大山の北西山麓を指しているものと思われる。彼らがたどったのは、現在の出雲街道だったのではなからうか。この街道は、姫路から、美作、津山、真庭と岡山県を斜めに横断して中国山地を超え、大山の西麓を経て米子に続いている。八雲自身「人のほとんど通わぬルートを辿った」と記しているので、山中で野宿をしながら向かったのか、もしそうなら、よくも山



松江略図

賊にも獣にも出会わなかったもの……と余計な心配もしたが、その昔には、松江藩のお殿様が参勤交代で使ったのもこの街道だったとすれば、それなりに整備されていたのかもしれない。

太平洋側から四日かけて日本海側に出た一行は、そこで宿を求めている。解説書のあとがきには、「（松江に入る前の）八月二十八日に鳥取県西伯郡逢坂村の上市に投宿した」とあり、「（八雲らが）一週間にわたる赴任の旅を終えたのは、一八九〇年八月三十日のことである。鳥取の米子港から汽船で中海、大橋川を遡上し、松江の八軒屋の船着場に着いたのである。そこから対岸の富田屋旅館にしばらく逗留することに決め、十月下旬まで、そこに寄留することになる」（「日本の面影」344—345頁）とある。

引用した文に、「一週間にわたる赴任の旅」とあるが、これは、東京から神戸までが汽車で一日、太平洋側から日本海側への中国山地越えが人力車で四日、逢坂村（あるいは米子）から松江までが二日とすれば、ちょうど一週間になる。

これでもうやく松江に着いたと思ったのだが、旅程確認の参考のために読んでいた「盆踊り」で、困ったことに出くわした。

八雲は、逢坂村の宿に投宿した際に、宿の主人に勧めら

れてその土地の盆踊りの見物に出かけ、それを題材にして「盆踊り」を書くことになるが、盆踊りの晩、十分なものでなしがでなかつたことを氣にした宿の主人が、「今日は、お盆の十三日なので、魚が出せないので。今月は十三、十四、十五日と、誰も魚を口にしてはいけないことになっています」と言つて詫びているのである。先に記したように、八雲たちが宿に泊まつたのは二十八日だったはずなので、二週間ほどのずれがあることになる。「お盆の十三日」が八月十三日だとすれば、八雲はまだ東京を發つていない。現地の暦と八雲の使つていた暦が別のものであったということなのだろうか？

八雲と松江を散歩する

八雲は、松江に入つて間もなく見聞きした町中の印象を「神々の国の首都」として、朝、床の中で目覺めてから、夕方、宍道湖の彼方に沈む夕日を眺め、同じ道を辿つて家路につき、床に入るまでの、ある日の散策記録という体裁にして、瑞々しい筆致で記している。

「松江の一日は・・・大きな振動で始まる」（「日本の面影」 73頁）というのが、その書き出しである。ここで言う振動というのは、米を搗く杵の音である。遠くの寺（洞光寺）からは鐘の音が、そして、少し時間が進むと、

大橋川にかかる松江大橋を行く下駄の音も聞こえてくる。今やこれらの音や振動は歴史の彼方に消えてしまったが、この川辺に立つてみると、こうした音がいつ戻ってきてもおかしくないように思えてくる。ところが、読み始めて間もなく、いくつかの、おや？と思う箇所に出くわした。

その一つは、「わが家に近い材木町にある地藏堂から、朝の勤行を知らせるもの悲しい太鼓の響きが聞こえてくる」とあり、「私は障子の窓を開け放つ。そしてまず、川沿いの庭に芽吹き始めた柔らかな新緑の茂みの向こうに朝の様子を眺めわたすのである。眼下に流れる大橋川の幅広い鏡のような水面（略）その水面は宍道湖へと注ぎ込み」（「日本の面影」74頁）とあったからである。

松江に到着した八雲は、しばらくは、大橋川にかかる松江大橋のたもと富田屋旅館（現在の大橋館のあたり）に身を落ち着けるが、間もなく自宅を手に入れている。私は、その自宅というのは、現在、小泉八雲旧居として公開されている所と思い込んでいたので、眼下に大橋川が流れているというのは、実情にそぐわないと思ったのである。

そこで、はじめは、富田屋旅館の一室を「わが家」と見なし作品を書き進めたのかと思ったのだが、その自宅について、随筆「日本の庭にて」の冒頭に、「大橋川そばの二階家は、鳥籠のように可愛らしく風情のある家だったが、

塩分の説明がつかないように思えてきたのである。

調べてみると、当初の私の考えに間違いはなく、大橋川は、宍道湖から中海に向かって流れている、というのが普段の姿のようだ。先に見たように、解説には、「八雲たちの乗った汽船は、大橋川を遡上した」と書かれていた。ただし、上流から下流へかけての高低差がないので、潮の満ち引きの影響を受けやすく、八雲が書いているように、中海から宍道湖に注ぎ込むこともあって、その結果、汽水湖となっているとのことであった。

さらにもう一つの「おや？」は、朝方、あちこちの家から聞こえてくる拍手についての記述である。出雲大社が近いことから、この地に神道が普及していることは納得するが、「パン、パン、パン、パンと四回ほど鳴った・・・」（「日本の面影」76頁）と書かれている点である。神社

での参拝は、二礼、二拍手、一礼と決まっているものと思っていたが、八雲は四拍手だという。今回の旅の最終日に、松江しんじ湖温泉駅から一畑電車経由で出雲に回り、出雲大社に寄って来たが、その案内の人から、ここでは、四拍手でお願いします、と言われ、この「おや？」も解消したのだった。

「神々の国の首都」での八雲の散策は、富田屋旅館とは道路を挟んで湖寄りにある最初の転居先（別の作品には

暑い季節が近づくにつれ、快適に過ごすにはその家では小さすぎる事がわかった」とあり、「町の北部にあたる、崩れかかった城の裏手の静かな通りへ引越すのははやむを得ないことであった」（「日本の面影」213頁）と述べている。

八月末に松江に到着した八雲は、十一月下旬まで富田屋旅館で過ごした後、一度、旅館の近くの二階家に転居したということのようである。大橋川を見下ろすその家（最初の転居先）を、八雲は気に入っていたが、暑さ凌ぎの意味もあって、城の北側の塩見縄手にある武家屋敷の一隅に移ったとのことだった。そこが、現在、八雲旧居として公開されているところである。

これで二つ目の「おや？」は解決したが、もう一つの「おや？」があった。それは、先の文章の、「（大橋川の）水面は宍道湖へと注ぎ込み・・・」というところである。厳密に調べたわけではないが、宍道湖の水は、出雲方面から流れ込む斐伊川を主たる水源とし、大橋川・中海を経由して、境水道から日本海に出ていくものと思っていた。しかしよく考えてみれば、中海も宍道湖も汽水湖なので、その塩分がどこからくるかと言えば、日本海からということになるだろうから、大橋川は八雲のいうように、日本海から中海を経て宍道湖に注ぎ込んでいると考えなければ、

「鳥籠のように可愛らしく風情のある家」とある）を出て、しばらくは、松江大橋からの眺め（対岸の船着き場や、川面に浮かぶ奇妙な白い物体）に好奇心を掻き立てられたりした後、ようやく、橋を渡り、市の中心部へと向かう。

橋の上からは、「朝靄が晴れると、湖の一キロメートルほど先に、美しい小島がくつきりと浮かび上がって」くるのが眺められた。この島は、岸辺からそれほど遠くない所にある「嫁ヶ島」で、この島にまつわる伝説についても、八雲はすでに説明を受けていたようだ。ツアー客の私たちは、松江に着いた翌日、観光船に乗ってこの島の近くまで行ってきたが、百五十年前に、この島を眺め、文章に残した外国人がいたと知ると感慨も新になる。

松江大橋を渡った八雲は、そのまま真っすぐ南下し、次の川のほとりにある天神様（白湯天満宮）に向かっている。周辺の天神通りについて、八雲は、「二本の川（一本は大橋川、もう一本は天神川だが、八雲の作品では、新土手川となっている）に挟まれたその一帯は、町の中でも裕福で活気に満ちた繁華街であり、寺が広く点在する興味深い一郭でもある。この川の中州のような一帯に、劇場から相撲場まで、ほとんどの娯楽の場所が集まっている。天神町と並行して寺の立ち並ぶ寺町がある。その広い通りの東側には寺院がずらりとならんでおり（略）それぞれの寺の境内

の後ろは、墓場になっている・・・」(「日本の面影」92頁)と描いている。

かつては、この天神通り界隈が繁華街だったようで、手元の文庫本には、「のれんを下げた商家が続く天神町」とのキャプション入りの写真が載っている。そこには、未舗装と思われる幅広い道の両側に、木造二階建ての建物が連なり、その前を着物姿の人が歩き、店先には荷物を積んだ大八車が停まっている。きつと活気のある大繁華街だったのだろう。今では、その地位を松江駅周辺に奪われ、天神町界隈に八雲の見た賑わいを感じることはできない。地図を見ると、天神通りの一本東側の寺町通には寺が集まり、その背後には墓地が広がっていて、この風景は、八雲の時代とほとんど変わっていないように思われた。

八雲は「神々の国の首都」の中で、松江市街は三つに分けるとして、「まず商人や商店主の地区は市の中心に位置し、どの家も二階建てである。次に寺町地区は、ほぼ市の東南部を占めている。三番目土族の居住区には、広い庭を巡らせた、部屋数の多い大きな平屋の屋敷が並んでいる」(「日本の面影」101頁)。と記している。

八雲のこの区分は、現在もそのまま当てはまるように思える。

なかったようだが、「屋敷の三方向を囲む一続きの庭」にはいたく満足した様子で、おそらく、この庭との出会いがあったからであろう、後に、「日本の庭にて」という好短編を著している。

いやいや、八雲旧居については、後で立ち寄ることにして、この日の散歩に戻ろう。

天神橋を渡った後について、八雲は、「密集した小さな狭い通りを抜け、人の住んでいない朽ちかけた武家屋敷をいくつも通り過ぎて、私は市内の南西の外れを目指した。湖に面した小さな蕎麦屋から、夕陽を見るためである」と記している。

この辺りの武家屋敷が、八雲の時代に、すでに朽ちかけていたということは、おそらく下級武士の住まいだったのだろう。上級武士には、もしものときにお呼びがかかるわけだから、彼らはお城の近くに住んでいなければならないからだ。

湖に面した蕎麦屋の正確な場所は知らないが、大まかに、現在の島根県立美術館のある辺りではなかったかと推測する。「(天神橋を渡って)市内の南西の外れ」という記述からおおよその見当はつくが、そこに島根県立美術館があるというのも推測の大事な根拠である。なぜなら、こ

中心部というのは、当時では松江大橋から天神橋にかけての天神町界隈、現在では松江駅の周辺ということになる。いずれも、大橋川と天神川の二本の川に挟まれた大きな三角州の上に出来た町ということになる。

寺町地区には、地図で見る限り、十ほどの寺院が密集し、その東側には墓地が広がっていて、先述のように、この風景は百五十年前とほとんど変わっていないように思える。

土族の居住区は、お堀端に残されている数軒の武家屋敷に代表されるように、お城のすぐ近くに集められているようだ(後述するように、下級武士の家は、城からは少し離れたところに集められていたのではなからうか)。お城の近くの一軒は、武家屋敷として一般に公開されており、その数軒隣には小泉八雲旧居がある。

八雲が、塩見縄手にある武家屋敷を手に入れ、そこを新居としたのは、それまで住んでいた、松江大橋のたもとの家が手狭に感じられるようになり、とりわけ夏の暑さ対策を考えてのことだったようだが、広さを手に入れた代わりに、「美しい湖の眺めを諦める」ことになってしまった。この引越について、「町の北部にあたる、崩れかかった城の裏手の静かな通りへ引越すのはもはややむを得ないことであつた」と記しているように、あまり乗り気では

の美術館の開館時刻は季節によって変動し、日没の三十分後となっているからである。この建物の、屋根が丸くくりぬかれた所に立ってみて、西に開けたこの場所は、夕日を眺めるには絶好の場所となっていることを知った。後になつて地図を見ていて、美術館から少し南に行つたところに「夕日スポット とるば」とあるのに気づいた。宍道湖の彼方に沈む夕日は、ここでは、八雲の時代から変わらず大事にされていることを知ったのだった。

ところで、「とるば」とは何なのか、外国語なのか、造語なのか気になった。名称など任意なのだとは割り切れば、そのまま覚え込むか、面倒ならスルーしてしまえばいいのだろうか、気になりだすとなかなかそうできない習性がある。調べてみると、これは外国語ではなく、「写真を撮るためのパーキング」を短縮した造語とのことだった。判つてしまえばナルホドということだが、命名に当たっては、他にどんな候補があつたのか、また疑問が湧いて来たが、八雲とは関係ない話だ。

夕日を見送った八雲は、来たときとほぼ同じ道を辿つて家路に着いている。天神橋の上では、欄干から小さな紙切れを川面に放っている女を見かけ、それが、亡くなった赤子を供養するためのものだったと知る。

彼が戻ったのは、もちろん、松江大橋を渡った左手にあ

最初の転居先である。部屋の障子を開け放つと、橋を渡っていく人たちの提灯の灯りが見え、洞光寺からの梵鐘が聞こえ、酔人の歌声や物売りの声の中に、「あめー湯」という水飴屋の聲が聞こえてくる。確かに、ここから大雄寺までは、一キロメートルほどの距離だ・・・でも、あの女は引き売りの飴屋から水飴を買ったのではなく・・・ああ、これは次の話だ。

小泉八雲旧居

明治二十三年八月末に松江に到着した八雲は、十一月まで富田屋旅館に逗留し、まず、すぐ近くの二階家に転居して翌年の六月まで過ごした後、塩見縄手にある武家屋敷を手に入れ、そこで小泉セツと結婚生活を送ることになる。ここが、現在小泉八雲旧居として公開されている所で、その西側に隣接して小泉八雲記念館がある。記念館の外観は和風だが、中は鉄筋コンクリート造りである。

旧居については、八雲自身、「かつて位の高い武士が住んでいた」と書いているように、敷地も広く部屋数も多く、上級武士の住まいであったことは想像に難くない。ここなら、太鼓で登城命令が発せられれば、すぐに駆け付けることができる。塩見縄手に面して長屋門があり、そこには「木牢のように頑丈に棧のはまった見張り窓」があつて、

こか、谷崎潤一郎の「陰影礼賛」につながるような印象を持った。

家の中をあちこち案内されていたときのことである。北側の庭に面した部屋の片隅に置かれていた机に、何気なく手を置いていると、案内の方が、「ヘルンさんの使っていた机です」と言うので、慌てて少し離れようすると、机はレプリカなので触れても、椅子に座ってもかまわない、本物は記念館に展示されているから、とのことだった。それにしても、まるで立って書き物をするための机ではないかと思えるほどの丈だったので、「ずいぶんと高いですね」と言うと、彼は視力がかなり弱く、紙に顔をくっつけるようにして書く必要があつたので、この高さになつたとのことだった。確かに、机には椅子もついており、小柄の彼がその椅子に座れば、机の上にちょうど顎が載るような姿勢になるのではないかと思われた。

北側の庭の片隅に小さな池がある。庭草に覆われていて、よく見えないが、八雲の時代、その池には蛙が生息していて、それを狙つてときどき蛇が出没したとのことである。餌食となる蛙を哀れと思った八雲は、自分の食事のための肉を蛇に分け与えたというエピソードが伝わっている。無駄な殺生はいけないという、日本人の素朴な自然信仰を受け入れてのことだったのだろう。何かの写真で、当時蛇が

「封建時代には、裏手から武装した家臣たちが、身を隠したまますべての通行人に、目を光らせていた」ということである。

八雲には、「日本の庭にて」という興味深い随筆がある。活け花や庭石に関する考察を含んで、日本の庭一般について書かれたものだが、かなりの頁を自宅の庭について費やしており、この家での生活がなかったら、生まれなかった作品だったのではなからうか。

かなり、日本をヨイショするような表現もあり、例えば、日本の生け花と西洋のフラワー・アレンジメントを比較して、「西洋人が『ブーケ』と呼んでいる花束などは、花を生殺しにする卑劣な行為であり、色彩感覚に対する冒瀆であり、野蛮で忌々しい蛮行に他ならない」（「日本の面影」216頁）と、そこまで露骨に言わなくても・・・と思わざるを得ない記述を残している。また、庭石についても、「外国人であるなら、たとえその人が審美眼を持ち合わせていようとも、石に対しての感覚だけは学習し、磨いておく必要がある。日本人の中には、生まれながらにしてその感覚が宿っている」（「日本の面影」218頁）と、私個人に関しては、日本人としての看板を下ろしたくなるような記述もある。ただ、全体としては、日本人の好む、色彩や陰影、非対称性の美しさ等についてよく理解されていて、ど

住み着いていた木というのを見たような気がするが、私の記憶にある木は、南の庭にある木なので、食事のためとはいえ、蛇はわざわざ南の庭から北の庭まで出向いたのだろうか、あるいは単なる私の思い違いなのか、確かめる間もなく、そこを出ることになってしまった。

小泉八雲記念館

八雲記念館では、八雲や妻のセツの生活用品、思い出の品などを見てきたが、メイン・イベントは、八雲曾孫小泉凡氏の講演を聞くことだった。彼は、記念館の館長でもあり、地元の名士、八雲研究の第一人者ということもあつて、なかなかの人気者のようで、この講演の一月前には、「雪女」の関係で、青梅市に行かれていたとのこと、また、講演後には九州に発ち、宮崎美子と対談することだった。講演の内容は、八雲はギリシャで生まれたこと、両親が離婚したこと、学生時代に左目を失明したこと、アメリカに渡って記者となつたこと、来日して、松江の学校の英語教師となり、小泉セツと結婚したことなど、すでに知っていることがほとんどだったが、講演が終わってから、質問を受けてくださるというので、二、三気になっていたことを聞いてみた。

一つは、八雲と言えば、「耳なし芳一」に代表される怪

談が有名だが、「日本人の微笑」のような、日本および日本人の心性について、日本人である私も気づいていないようなことについて、言われてみればその通りと思えるような分析を加えていて驚かされるが、こうした作品が英語で書かれたということは、英語圏の人に向けて書かれたということなので、そこではどのように受け止められたのか気になっていた。そのことを聞いてみると、面白い答えが返って来た。

「ドナルド・キーンのように・・・」と、いきなりビツグネームが出てきて驚いたが、どうやら、キーンは八雲批判の先鋒だったようだ。確かに、八雲の小説は、オリジナル作品というより再話なので、鴎外や漱石など日本文学の本流を研究してきた人からすれば、異端だったことは疑いえない。それに、八雲は、大の西洋嫌い、キリスト教嫌いだったこと、そして、あらゆるものに神が宿るといった、素朴なアニミズム信仰を大事にしており、八百万の神の存在を認める日本精神の理解者であったことなどが、キーンにはあまり面白くなかったのかもしれない。

その一方で、八雲には強力な理解者もいたようで、その一人が、我が国の戦後処理に当たったマッカーサー司令官の副官として来日したボーン・フェラーズであった。彼は、来日以前から八雲の著作に触れ（ハーン・マニアという評

価もある）、そこに日本人の心性を読み取り、とりわけ、天皇をどう位置付けるかということについて重要な進言を行い、戦後日本の重要な方向付けをした人物とのことであった。ボーンについては興味深い論考もあるようだが、ここでは省く。大事なことを一つだけ記しておこう。小泉凡氏ご本人によれば、お名前の「ぼん」は、この「ボーン」に由来することであった。

もう一つの質問は、怪談に関するものである。

今回の散歩の道案内に選んだ「神々の国の首都」は、随筆に属する作品だが、松江を舞台にした二篇の怪談が挿入されている。

一篇は、松江城の東方、普門院近くの「小豆腐橋」（現在、この名前の橋はない）と呼ばれる橋にまつわる話だが、ここでは割愛する。もう一つの「水飴を買う女」が、以前から気になっていた。

中原町の飴屋に、毎夜、水飴を買いに来る女がいた。不審に思った店主が後をつけると、女は大雄寺の墓地に入って行った。飴屋は怖くなつてその日は逃げ帰ったが、翌日、店を訪れた女に誘い出され、ついていくと、ある墓の前で女は姿を消し、どこからか赤子の鳴き声が聞こえてきた。声のしてきた墓を暴いてみると、赤子が出て来た。女の死後に生まれた子どもで、自分の乳では育てられないと思っ

た女が、乳の代わりに、飴を求めに来ていたというのだ。た。「水飴とは、麦芽でできた琥珀色の液体で、お乳をもらえない赤ん坊は、お乳の代わりに水飴を飲んだものである」（「日本の面影」105頁）とある。

この話を讀んだのは比較的最近のことである。全く同じ話が京都に伝わっていることを知っていたので、八雲が、再話に際して、舞台を京都から松江に移したのではないかと思つたのだ。た。

そのことを、凡さんに尋ねると、これは正真正銘、松江に伝わる話だという。もちろん、京都の話もご存じの様子で、こうした話は、日本各地に伝えられており、そのようにして救い出された子どもは、たいてい、長じて偉人や豪傑になるのだが、松江の場合は、そこまでの話は伝わって来ていないとのことだった。

そして京都

もう十年以上も前のことになるだろうか、テレビの旅番組を見ていて、京都に、夜ごと女の幽霊が水飴を買いに来たという店のあることを知った。以来、京都には何度も行く機会があったが、なかなか飴屋まで足を延ばすことはなかった。場所は、五条坂の近くなので、街中にはちがいないが、京阪電車の清水五条駅から少し歩かなければならい

こともあつて、私にとってはやや行きにくいところだった。すぐ近くの建仁寺には、四条通りから花見小路を利用したこともあつて、その先まで思いが廻らなかった。六道珍皇寺には行ったときには、小野篁が黄泉の国への往復に使つたといわれる井戸のことばかりに気が向いていて、八雲作品を讀んだ後の今ほど、切羽詰まつた思いがなかったということもある。

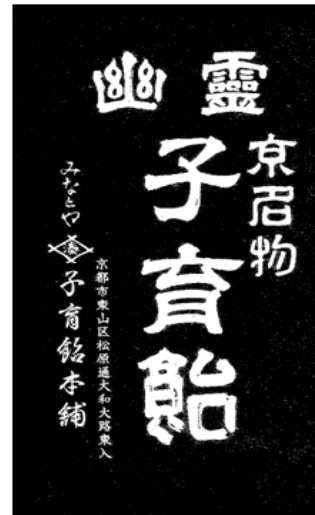
飴屋までの道順を確認していて、五条のこの界限には、是非とも訪れるべき大事な寺のあることに気がついた。飴屋の手前にある六波羅蜜寺に安置されている、口から六体の阿弥陀仏を紡ぎ出す空也上人立像は、二、三年前に、上野の博物館で展示されたものではなかったか。そのときは、京都の仏像を、何も東京で見ることはないだろうと足を運ばなかったが、ずっとそのままになっていたのだった。

飴屋に行くことが第一目的だったので、大して下調べもしないで出かけて行って、改めて無知を恥じた。六波羅蜜寺には、空也上人立像だけでなく、国宝の十一面観音像（これは、十二年に一度の御開帳ということで、つい最近御開帳があつたばかりだった）をはじめ、平安時代の薬師如来や地藏菩薩、鎌倉時代の四天王像や閻魔大王像、それに清盛像など、国の重要文化財が十体以上展示されている。仏像群のなかに、清盛像は異質だが、彼の邸宅が六波羅に

あったことを考えれば、仕方ない(?)のかもしれない。

六波羅蜜寺前の路地を北に向かつて歩き始めると真正面に、ガラスの引き戸を設えた瓦葺の二階家が見えていた。軒に掲げられた看板と店先に立てられた旗には、確かに

《幽霊 子育飴》とある。ガラス戸を開け、中に入ると、店主とおぼしき初老の男性が、奥で遊んでいたのであろう、お孫さんと思われる子どもと一緒に出て来た。ここで売られているのは水飴ではなく、べっ甲色に固められた麦芽糖の飴であった。「古いんですね?」と水を向けると、「幽霊が買いに来たのは、一五九九年です」との答えが返ってきた。四百年以上も前のことだが、ついこの間のこのような口ぶりだった。松江・大雄寺のことを持ち出すと、この手の話は、あちこちにあるが、ここ京都が本家?という



京都の飴屋のラベル

ことだった。店の片隅に、店を訪れた水木しげるの写真が載っている変色した週刊誌のコピーが展示されていた。六波羅蜜寺にも外国人は少なかったが、飴屋の前を通る外国人はいても、店に入ってくる外国人はいなかった。

やっちゃんのへ肝試し

あの日、学校を出るのが遅くなったのは、日直仕事を終えるのに時間がかかっていたからである。日直は男女一人ずつのペアで行うことになっていたのだが、その日の相手のKちゃんが、早退してしまったので、私一人でやらざるをえなかったのだ。

学校を出た時、少し暗くなりかけていたような覚えがあるのは、夕暮れが迫っていたからなのか、雨模様だったからか、はっきりしない。田んぼが青々としていたという記憶はないから、二学期のことではなかったろうか。校門を出て急な坂道を下り、田に水を供給するための用水路にかかる橋を渡れば、あとは曲がりくねってはいるが平坦な田中の道を進むことになる。坂の下で渡った用水路の支流のようになっている小川にかかる橋を渡り、その流れに沿って行くと、先の方を歩いて行く男の子の姿が見えた。誰だろう?という思いより先に、一人ぼっちの心細さからだろう、すでに足早になっていた。なかなか追いつかなかった

のは、相手の足も速かったこともあるし、かなりの距離があったからだ。遮るものがないので、距離はあっても見通しは良かった。

あれは、同級生のやっちゃんに違いないと思ったのもつかの間、急に姿が見えなくなった。その近くには民家はなし、交差する道もない。田んぼの他にあるのは、用水路と、この通学路で一番いやな所、近くの集落の共同墓地である。周囲に生け垣をめぐらしてあるので中の様子は見えないが、おそらく数軒分のお墓があったのではなかろうか。そこで姿が見えなくなったということは、墓地に入ってしまったからに違いない。以前に、僕らが、あそこは怖いよな、気持ち悪いよな、などと言うと、やっちゃんとはときどき、へ肝試しのために、そこに入ってみることがある、と

語っていたことがあった。この日も、それを実行したのだろうくらいにしか考えなかった。あるいは、後ろからくる私に気づいて、隠れて脅かしてやれとも思ったのかもしれない。

しばらく、墓地の入り口を注意して見ていたが、人が出入りする気配はなかった。周囲を田んぼに囲まれた墓地なので、反対側に出口はないし、先を見ても、歩いている人の姿は見えないので、一体何だったのだろうと思いつながら、そこを離れようとしたとき、「おーい、おーい」と呼

ぶような声が聞こえた・・・いや、聞こえたような気がしたのだった。「やっちゃんか?」と声をかけたが、返事はなかった。もちろんその後は、逃げるようにして走って帰った。それが、私が見たやっちゃんの最後の姿だった。

その後間もなく、始業前のホーム・ルームの時間に、担任のW先生から、やっちゃんが転校することになったと伝えられたのだった。五小を辞めてどこに行くのか、何が理由なのかまでは教えてくれなかった。普通転校と言えば、本人が挨拶をしたり、お別れ会を開いたりしたと思うが、そういうことはなかった。私の記憶の中では、墓地に消えていった直後のことだったので、それが理由ではないかと思っていた。このことは、誰にも言わなかったけれど。

卒業して三、四十年たって、小学校のクラス会があった。当時のことが気になって、やっちゃんの家の近くに住んでいた同級生に、消息を聞いてみると、転校の経緯もその後のことも、詳しいことは何も知らないとのことだった。そもそも、彼は転校生で、来た時も突然だったが、去る時も突然だったとのことだった。同級生の話では、いわゆる夜逃げではなかったかというのだが、それは大人たちの考える理由であり、やっちゃんは、あの日からずっと、あそこへへ肝試しをしているに違いないのだ。

<八雲を巡る点と線>

文
献

新編 日本の面影 ラフカディオ・ハーン (池田雅之

訳) 角川ソフィア 平成十二年

新編 日本の怪談 ラフカディオ・ハーン (池田雅之

編訳) 角川ソフィア 平成十七年

小泉八雲 日本の美と霊性の発見者 池田雅之 角川ソ

フィア 令和三年